

3—8 国 語

国 語

(3—8)

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、13 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のアイ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**や・や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) のるか反るか、やってみよう。
- (2) 折節の移り変わりを楽しむ。
- (3) 蚕糸をつむぐ。
- (4) 野放図に広がる。
- (5) 流言飛語にまどわされる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書^{かいしょ}で書け。

- (1) 中興のソとなる。
- (2) カンチヨウになり陸地が現れる。
- (3) トロウに終わる。
- (4) ハトバに船が着く。
- (5) キキュウソンボウの時だ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

大学を卒業したユウは、母が社長を務めるミツワネジに就職する。現場研修のために訪れた、長谷川螺子兄弟社の長谷川社長に指導を受けながら、技術や経営の基本について学んでいる。

それからもUボルトをつくり続けた。図面どおりの製品をだ。つくりながら後悔していた。黙って図面の製品を言われたままにつくってれば、自分は予定よりも一週間ほど早く現場研修を終えていたのではないかと。なにに使われる部品なのか、などと訊くんではなかったとつくづく思い返す。

だが本当にそうだろうか？ エレベーターに使われる部品だと知って、自分はそのまでの精度が出せたのではないのか？ 知らなかったら、三ヶ月程度で自分に図面どおりのUボルトなんてつくれるはずがない。だったら、その差はなんだ？

工場が休みの週末も、ユウは自然と長谷川螺子兄弟社に自転車走らせていた。ドアの前に立つと、中から作業する音が聞こえた。やっぱり。重い鉄のドアを引くと、女の悲鳴のように甲高くきしむ。

「おはようございます。」

なんとなく長谷川は休みの日も出社しているような気がしたのだ。機械に向かっていた彼が振り返る。

「なんだ、休みなのに出てきたのかい？」

「長谷川社長だって。」

と言ったら、苦笑いする。

「俺たちは、うちでゴロゴロして邪魔にされるよか、ここにいるほうが気が楽だ。」

今度はふたりして笑い合った。

「あなたのおじいちゃん、ミツワネジの創業者、忠志社長も仕事に興味のような人だったっけな。」

意外な名前を耳にした。

「ご存じんですか、祖父を？」

「ああ。」

と長谷川が手を休める。

「忠志社長は、もともとネジのバイヤーだった。方々から注文を集めてきて、それをあちこちのネジ屋につくらせてた。うちも仕事をもらってたよ。工料も弾んでもらったな。」

長谷川は昔を懐かしむような目をした。

「腕っこきのバイヤーだったんで、たくさん注文を取ってくる。ところが、ネジ屋のほうで忙しくて手が回らなかったり、注文の製品自体が技術的につくれなかったりすることがしばしばあった。できるって手を挙げるネジ屋があっても、先方の言うがままに値段を付けられてしまう。それで、忠志社長は自分でつくるようになったんだ。最初は仕事を発注してたネジ屋の機械を借りてな。徹底的に図面を読み込むっていうのが、あの人のやり方だった。」

(1) 図面を読み込む……か。

「もともと図面を読む力があったからこそ、適材適所のネジ屋に適正な価格で仕事を出せてたんだ。そう、忠志社長は決して値切ったりしない。ネジ屋が満足する金額を払ってくれた。それは、あの人が積算した、しごく妥当な金額だったに違いない。ところが、さつきも言ったように受けてもらえない仕事も多くあった。忠志社長がこんなことを言っていたよ。確かに発注先の仕様が細かかったりすると、リスクが高い。しかし、難しい注文にこそチャンスがあるんだ。そして、忠志社長は自分で注文を受けて自分でつくることを選んだ。ミツワネジを創業したわけだ。」

そこで長谷川がつくづく言う。

「あんた、やっぱり忠志社長の孫だ。この製品がなんなのかを知りたがる。」

「でも、祖父は図面を見てつくってたんですね？」

「図面を読み込むことで、製品を理解することもできる。忠志社長がそうだった。」

長谷川が再びユウに背を向け、機械を動かし始めた。

「今日は帰んな。しっかり休むことも、いい仕事をするためには必要だよ。」

ユウは作業台にUボルトの図面を広げた。おじいちゃんは図面を読み込んで製品がなんなのかを知ろうとした。図面を眺めていたら、長谷川がまたちよつと振り返ってひひひと笑った。

⁽²⁾「頑固だなあ、あんたも。」

そんなささやきが聞こえた。

来る日も来る日も、ユウは図面の規格どおりのUボルトをつくり続けた。そして、やはり思う、自分にはこれがなんの部品なのか知る必要があった、と。なぜなら……。

「長谷川社長、見ていただきたい製品があるんです。」

「うん？」

気のない返事をする長谷川の前に、ユウは自分がつくったUボルトを差し出した。

「こいつがどうしたんだい？」

やはり関心がなさそうに受け取る。そして、Uボルトに切ったネジを眺め、指先で触れていた。すると、今度は急いでネジゲージで試し始めた。次の瞬間、「こ、こりゃあ……。」⁽³⁾ 目を見開くようにした。そして、ユウに顔を向ける。

「あんたが考えて、つくったってことだよな？」

「はい。」

長谷川が再び手の中にあるUボルトに目を落とす。その片側のネジは、ネジゲージの通り側に差し入れられていた。

「あんたに訊かれたから前にも応えたが、このUボルトは必要な配管をエレベーター周りに固定するためのものだ。壁にふたつ穴を開け、ボルトの両方の先をそこにに入れて、壁の向こうから雌ネジのナットでネジどめする。そうやって壁に沿わせてUボルトの間に管を通すわけだな。」

ユウは頷いた。

「人の命にかかわるつてんで、一級の公差が設定されてることも言った。」
「ええ。」

返事したユウに向かって、今度は長谷川が頷き返す。

「ところが、あんた、今持ってきたこの製品では、その公差内ぎりぎり最後のネジ山を潰してるな？」

^{*}「ネジ切り盤のローラーに押し当てて潰しました。」

ユウは応えた。

「ずいぶんと器用な真似をしたもんだ。」

長谷川が感心したようにため息をつく。

「それもほんのわずか。見た目では分からない。指の腹で触って、プロが確認できる程度だ。ほかのネジ山の天辺が切り立ったようになってるのに、最後のネジ山だけがコンマ数ミリの違いで平らになってる。」

ぎろりとこちらを睨む。ユウは、その目を見返した。

「一級の公差が設けられたのは人命にかかわる部品だからだと、長谷川社長はおっしゃいましたね？」

「ああ言ったよ。」

「つまり、ボルトが緩むと事故につながりかねないからです。」

「そうだな。」

「だから、緩まないボルトにする必要があると考えたんです。」

「で、ネジ山を潰したか？」

「はい。」

長谷川は難しい表情でしばらくユウの顔を見ていた。だが、その口もとがほぐれ、やがて声を上げて笑い出した。

「こいつはいいや！ ボルトが緩まないようにネジ山を潰すなんてな！ よくぞ考えたもんだ！」

腹を抱えるようにして笑っている。ユウは呆気^{あっけ}に取られて見ていた。

長谷川がひーひー息を整えながら、「ごめんな、つい嬉しくってさ。」言葉をもらす。

「ユウちゃんは最後のネジ山の天辺をカットしたんじゃなくて潰した。ただ天辺をカットして平らにしたんじゃ、逆効果だ。雌ネジとの摩擦が弱まっちゃう。ところが、潰したとなると話が違う。この平らになった分は、コンマ何ミリかネジ山が太くなる。最後のネジ山だけは多少きついかもしれないが、その分ギョッとひと締めすることで、緩みにくいUボルトになったってわけだ。ネジゲージの通り側が、ねじ込めるんだが、最後のところで力を込める必要がある。」

優しい眼差し^{まなざし}を向けてきて、「そうだな？」と、ネジゲージにねじ込まれたままのUボルトをかざす。

「はい。」

ユウは応えた。

「図面を読み込むことで、そこにはないものが見つかったんです。これも、Uボルトがなんの部品かを知ったおかげです。」

「硬い鉄も、外力を加えれば変形する。どこかが凸^{でこ}れば、どこかが凹^{へこ}む。転造ネジを完全に理解したってことだな。」

そう言ったあとで長谷川が首を振った。

「だがな、図面どおりでない以上は、せっかく工夫したこのUボルトも

オシヤカだ。」

「でも……。」

「でもなものもない。それがネジ屋ってもんだ。」

それがネジ屋——。

「しかしな、このオシヤカのUボルトをこしらえたユウちゃんの、その意気やよしってもんだ。」

長谷川が歩いていって、作業台に持っていたUボルトと外したネジゲージを置く。そしてこちらを見ずに、「胸張ってミツワネジに戻っていいぞ。」と告げた。

「じゃあ。」

「研修終了だ。」

(上野歩「就職先はネジ屋です」による)

〔注〕Uボルト——U字形のボルト。両端にネジ部分があり、反対側からナットで閉じるように固定する。

バイヤー——仕入れ担当者。

工料^{こうりょう}——工作・加工に対して払われる料金。

ネジゲージ——製作したネジが規格に合っているかを確認するための測定器具。

雌ネジ——内周にみぞを入れてあるネジ。ナット。

公差——工業製品などで、公式に許容されている誤差の幅。

ネジ切り盤^{ねじきりばん}——ネジ部分にみぞを入れる工具。

転造ネジ——鋼材を切削せずに、圧力を加えることでネジの山と谷の部分を加工したネジ。

オシヤカ——作りそこなった製品。

〔問1〕⁽¹⁾ 図面を読み込む……か。とあるが、このときのユウの心情を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 黙って製品を指示通りにつくっていれば、図面を読み込むというやっかいなことをしなくてすんだのにと、後悔し始めている。

イ 長谷川が言うように祖父と似た力量の自分ならば、必ずよいネジがつくれると、自信を得たような気持ちになっている。

ウ ユウの祖父のやり方を長谷川が懐かしむように言うので、自分には別のやり方があるはずだと、反発する気持ちになっている。

エ 祖父がしたように、図面を読み込むことで何か見えてくるのかもしれないと、きつかけをつかんだような気持ちになっている。

〔問2〕⁽²⁾ 「頑固だなあ、あんたも。」とあるが、このときの長谷川の心情を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア いつまでもUボルトにこだわり続けるあまり、自分の助言を聞き入れようとしないユウに、指導者としてさびしさを覚えている。

イ あきらめることなく図面と向き合い続けるユウを見て、かつての自分の仕事に対する姿勢と重なるものを感じ、懐かしんでいる。

ウ 自分の忠告も耳に入らないほど熱心に仕事に打ち込むユウの姿が、忠志社長と同じだと感じて好ましく思っている。

エ 家にいるよりも仕事をしている方が気が楽という点で、自分と同じ考えを持っているユウに親近感を覚えている。

〔問3〕⁽³⁾ 目を見開くようにした。とあるが、なぜ長谷川はこのような表情になったのか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 見た目は他と同じネジだと思っていたが、触っているうちにふつうとは違う工夫があると気づき、驚いたから。

イ はじめは無関心だったが、ユウが規格どおりの製品をつくったとわかり、技術の向上に目を見張る思いがしたから。

ウ 見せられたネジが、製品としては全く売り物にならないものだったので、ユウの意図が理解できなかったから。

エ ネジをユウに差し出された瞬間から、それが明らかに普通とは違うものであると気づき、感心したから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「研修終了だ。」とあるが、なぜ長谷川はこのように言ったのか。その理由を五十字以内で書け。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 回想的な場面を入れることで、感傷にひたり、現実から目をそむけようとする登場人物の姿勢を描いている。

イ 会話文中の言葉づかいの違いによって、登場人物が互いに反目し合っていることを暗示している。

ウ 業界特有の語を多用することで、ものづくりの独特な世界観を表現し、登場人物を生き生きと描写している。

エ 登場人物の表情の描写を抑えることによって、かえってその時の心情に読者の関心を集中させている。

次の文章は、「高齢化」と「人口減少」という現代日本の問題を踏まえ、「人口減少社会のデザイン」というテーマで今後我々が構築すべき社会について論じたものである。本文を読んで、あとの各問に答えよ。

(＊印のついてる言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

(1) 私はある時期から、成熟社会の姿としては、ヨーロッパの街の姿の

ほうがはるかに生活の質が高いということを実感するようになった。一般に、ヨーロッパの都市では、高齢者、あるいは高齢者に限らず様々な人々が、ごく自然に市場やカフェなどでゆっくり過ごす姿が見られる。そうした場所が街の中にあるのは、ある意味で、医療施設や福祉施設を作るより重要な意味をもつことがあるのではないか。したがって、やや硬い言い方をするならば「都市政策と福祉政策の統合」、つまりまちづくりや都市政策と福祉政策をつないでいくという発想が求められているのではないか。

一般にヨーロッパの都市においては1980年代前後から、都市の中心部において自動車交通を抑制し、歩行者が歩いて楽しめる空間をつくっていくという方向が顕著になっている。

都市のありようを「歩行者が歩いて楽しめる」姿にしていくことが、コミュニティあるいは「福祉」的な意味、そして(自動車交通の削減によるCO₂排出抑制といった)「環境」面での効果のみならず、中心市街地の活性化やヒト・モノ・カネの地域内循環という「経済」の観点からもプラスの意味をもつのであり、「福祉―環境―経済」の相乗効果という発想が重要となる。

こうした都市の空間のありようは、人間の「こころ」ないし心理面や「つながり」の感覚などにも大きな影響を及ぼすのではないだろうか。

私はここ10年ほど、建築や都市計画、まちづくりの分野の方と交流したり、仕事上で御一緒することが増えているが、都市空間・地域空間の

あり方というハード面が、「コミュニティ感覚」ないし「つながり」の意識のようなものに非常に影響しているという視点が重要と思われる。自身は後者(コミュニティのソフト面)への関心が進化していく中で、都市や地域の空間のあり方に行き当たったわけだが、逆にしばらく前から、建築や都市計画分野の方が「コミュニティ」のソフト面に関心を広げる傾向が顕著になっており、自ずとそこにクロス・オーバーが生じることになる。

たとえば、現在の日本の都市がそうであるように、道路で分断された都市、あるいは首都圏で顕著であるように職場と住居があまりにも遠いこと、あるいはクルマ依存型の地域構造のため「買い物難民」が600万人ないし700万人といった規模で存在する等々といった状況では、「コミュニティ感覚」は大幅に損なわれてしまうだろう。

コミュニティあるいはコミュニティ感覚を重視したまちづくり、地域づくりということが、良くも悪くも経済効率ないし「経済成長」一辺倒で都市や地域を作ってきた戦後日本の価値観からの転換の大きな柱として、成熟社会においては非常に重要になってきているのである。

(中略)

本書においては、「人口減少社会のデザイン」というテーマを中心に述べて、今後私たちが実現していくべき社会のありようやその土台となる理念ないし思想を、「持続可能な福祉社会」というコンセプトを軸に吟味してみた。

議論の手がかりとしてまず考えてみたいのは、「グローバル化の先の世界」あるいは「グローバル化の終わりの始まり」という視点である。

あらためて言うまでもなく、私たちが現在言うような意味での「グローバル化」を最初に本格化させたのはイギリスである。つまり同国において16世紀頃から資本主義が勃興する中で、たとえば1600年創設の東インド会社――これは株式会社の起源ともされる――に象徴されるよう

に、イギリスは国際貿易の拡大を牽引し、さらに産業革命が起こって以降の19世紀には、「世界の工場」と呼ばれた工業生産力とともに植民地支配に乗り出していった。

他でもなく「グローバル化を始めた国」であるイギリスが、少なくともグローバル化に対する「NO」のメッセージを発信するに至ったというのが今回のEU離脱の基本的な性格と言うべきだろう。

つまり「グローバル化の始まり」を先導した、まさにそのイギリスにおいて、「グローバル化の終わり」という方向への動きもまた始まったのである。

しかし他方で、私は以上とは別の意味で「グローバル化の限界」が様々に見え始めているのが現在の世界であり、今後はむしろ「ローカライゼーション」という方向が新しい形で進んでいく時代を迎えると考えている。

すなわち、環境問題や持続可能性などへの関心が高まる中で、まずは地域の中でできる限り食糧やエネルギー（特に自然エネルギー）を調達し、かつヒト・モノ・カネが地域内で循環するような経済をつくっていくことが、地球資源の有限性という観点からも望ましいという考え方が徐々に広がり始めている。

こうした方向がかなり浸透しているのはドイツや北欧などの国々であり、これらの地域では、「グローバル経済から出発してナショナル、ローカル」という方向で物事を考えるのではなく、逆にむしろ「ローカルな地域経済から出発し、ナショナル、グローバルと積み上げていく」という社会の姿が志向され、実現されつつある。ちなみにドイツは周知のように2022年までの原発廃棄をうたうとともに、電力のうち再生可能エネルギーによるものがすでに約4割となり（2018年）、また2050年にはそれを8割にまで高めることを目標としている。

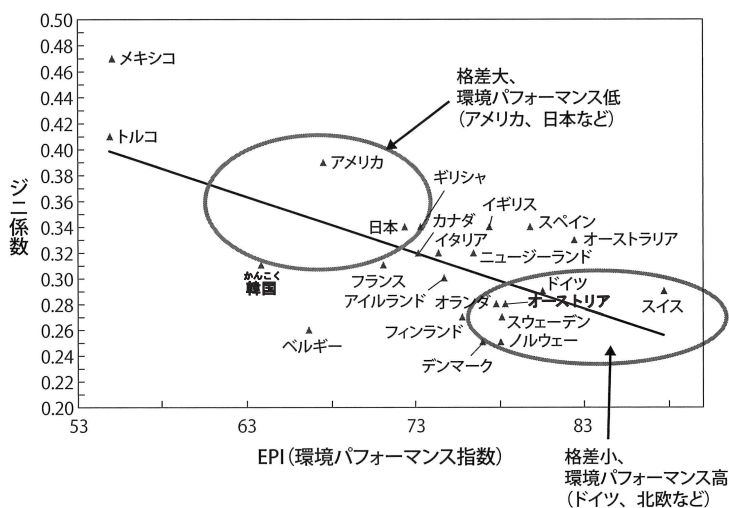
したがってやや単純化して対比すると、「グローバル化の終わり」あるいは「グローバル化の先」の姿には大きく異なる二つの姿があると言える

るだろう。

一つは強い「拡大・成長」志向や利潤極大化、そして排外主義とセツトになったナショナリズム的な方向である。

もう一つは、ローカルな経済循環やコミュニティから出発し、それをナショナル、グローバルへと積み上げながら「持続可能な福祉社会」と呼ぶる姿を志向する方向であり、上記のようにドイツ以北のヨーロッパに特徴的である。

図表 7-1 「持続可能な福祉社会」指標



(注) ジニ係数は主に2011年 (OECD データ)。EPIはイェール大学環境法・政策センター策定の環境総合指数。

以上のような二つのベクトル*のせめぎ合いが顕著になっているのが現在という時代ではないか。

こうした点に関して、図表7-1を見ていただきたい。これは縦軸に「経済格差」を示す指標であるジニ係数をとり、横軸にはEPI (環

境パフォーマンス指数、Environmental Performance Index) と呼ばれる、イェール大学環境法・政策センターが策定した「環境」に関する総合的な指標をとって国際比較したものだ。縦軸の「経済格差」は「福祉」に関わるものなので、この図は「福祉」と「環境」とを包括的に俯瞰した

図表 7-2 「環境－福祉－経済」の総合化

	機能	課題ないし目的
環境	「富の総量（規模）」に関わる	持続可能性
福祉	「富の分配」に関わる	公平性（ないし公正、平等）
経済	「富の生産」に関わる	効率性

ものとも言えるだろう。

興味深いことに縦軸と横軸はある程度関連しており、左上のグループは「格差が大きく、環境パフォーマンスも良くない」国々であり、先進国ではアメリカや日本などが含まれる。逆に右下のグループは「格差が小さく、環境パフォーマンスも良い」国々であり、ドイツやスイス、北欧諸国などがここに含まれる。

そしてこの点は、先ほど言及した「持続可能な福祉社会 sustainable welfare society」という社会のあり方とまさに関連している。つまり「持

続可能性」は「環境」と関わり、「福祉」は富の分配の公正や個人の生活保障に関わるもので、「持続可能な福祉社会」とは、「個人の生活保障や分配の公正が実現されつつ、それが環境・資源制約とも調和しながら長期にわたって存続できるような社会」を意味している。

言い換えれば、「持続可能な福祉社会」というコンセプトの主眼は、「環境」の問題と「福祉」の問題をトータルにとらえる点にあり、⁽³⁾図表7-1はまさにそうした観点からの国際比較なのである。

⁽⁴⁾「環境」と「福祉」にさらに「経済」という点を加えて整理すれば図表7-2のようなものとなる。この場合、人口を含めて拡大・成長の時代においては、「経済」という点に一義的な価値が置かれる傾向が強くなるが、成熟・定常化あるいは人口減少の時代においては、持続可能性に関する「環境」の視点、富の分配の公正に関する「福祉」の視点を総合的に見ていく必要があるのだ。

そして、再び図表7-1にそくして見れば、グラフの右下にあるドイツや北欧といった国々は、縦軸の「福祉」のパフォーマンスも、横軸の「環境」のパフォーマンスも良好であり、まさに「持続可能な福祉社会」という社会像に近い姿を実現しつつあると言える。

しかもドイツやデンマークなどに特に顕著であると思われるが、⁽⁵⁾こうした国々は先ほど述べたように、ローカルな経済循環やコミュニティから出発しつつ、それをナショナル、グローバルへと積み上げていくという姿を志向している。

ここで誤解のないように補足すると、上記のように「ローカルな経済循環」から出発するというのは、必ずしもローカルな地域のみで完結したり閉鎖的になることを意味するわけではない。ローカルなヒト・モノ・カネの循環から「出発」という点が重要であり、その先にどのような形態をとるかについては様々な可能性があると言っべきだろう。

（広井良典「人口減少社会のデザイン」による）

〔注〕クロス・オーバー——異なる要素が混じり合うこと。

買い物難民——食料品や生活に必要な物の買い物に困る人々。

コンセプト——基本的構想。

グローバル化——人、物材、情報の国際的移動が活性化して、「国

境」の意義があいまいになる変化のこと。

勃興——急に勢力を得て盛んになること。

ローカライゼーション——地域化すること。

ナショナル——国家。

ベクトル——方向性。

俯瞰——高いところから見下ろすこと。

〔問1〕⁽¹⁾ 私はある時期から、成熟社会の姿としては、ヨーロッパの街の姿のほうがあるかに生活の質が高いということを実感するようになった。とあるが、このように言えるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 医療施設や福祉施設を中心とした都市空間を作ること、高齢者が暮らしやすい街作りというハード面の目標達成を図っているから。

イ 人と人とのつながりを重視した都市空間を設計すること、そこで生活する人々の心の健康により影響を及ぼしているから。

ウ 地域ごとの役割を明確化し、職場と住居を分断した地域作りを行うことで、人々の「コミュニティ感覚」を養おうとしているから。

エ 経済効率に重点を置いた都市政策を行うことで、業務が効率化され、地域のコミュニティでゆつくり過ごす時間が確保されるから。

〔問2〕⁽²⁾ 「グローバル化の終わりの始まり」とあるが、これはどのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 経済やモノの往来の拡大成長が限界に達した先進国が、これから拡大成長していく途上国と入れ替わる時期に来ているということ。

イ 経済やモノの往来の拡大成長が世界中に行き渡ったため、もはやこれ以上の拡大成長が不可能な時期に来ているということ。

ウ 経済やモノの往来の拡大成長とともに環境破壊などの負の側面も急速に広まり、世界が終末的な状況を迎えつつあるということ。

エ 経済やモノの往来の拡大成長を実現してきたこれまでのあり方に限界が見え、異なるあり方に転ずべき時期に来ているということ。

〔問3〕⁽³⁾ 図表7-1はまさにそうした観点からの国際比較なのである。とあるが、図表7-1から読み取ることができる内容として正しいものはどれか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア メキシコは福祉が行き届いているが、環境パフォーマンスは悪いと言える。

イ ベルギーは福祉が行き届いている上に、環境パフォーマンスも良好だと言える。

ウ アイルランドは福祉が行き届いていない上に、環境パフォーマンスも悪いと言える。

エ オーストラリアは福祉が行き届いていないが、環境パフォーマンスは良好だと言える。

〔問4〕「環境」と「福祉」にさらに「経済」という点を加えて整理すれば図表7-2のようなものとなる。⁽⁴⁾とあるが、次に掲げるのは、本文と図表7-2について、四人が交わした授業中の会話である。四人の生徒の発言のうち、筆者の考えに即しているものはどれか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 生徒A——拡大・成長の時代では、富を公平に分配し、人々がみんな平等に豊かになることが目的になるよね。だから、「経済」の効率性が重視されると思うんだ。

イ 生徒B——いやいや、拡大・成長の時代では、「経済」を重視した社会となるから、むしろ生み出された富の公平な分配や、その持続性は後回しになるんだよ。

ウ 生徒C——じゃあ、人口減少の時代では、富を効果的に生み出すという「経済」の視点よりも、すべての人が豊かな自然環境を享受する「福祉」の視点のほうが重要だと言えるよね。

エ 生徒D——そうかなあ。成熟・定常化の時代では、富の総量を増やすという「経済」の効率性を最優先にすることが、持続可能な社会の実現につながるはずだよ。

〔問5〕こうした国々は先ほど述べたように、ローカルな経済循環やコミュニティから出発しつつ、それをナショナル、グローバルへと積み上げていくという姿を志向している。とあるが、現代の日本において我々はどのような地域社会をつくっていくべきか、本文の内容を踏まえ、身近な地域の例を挙げながらあなたの考えを二百四十文字以内で書け。なお、や。や。やなどのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。⁽⁵⁾

ミューニティから出発しつつ、それをナショナル、グローバルへと積み上げていくという姿を志向している。とあるが、現代の日本において我々はどのような地域社会をつくっていくべきか、本文の内容を踏まえ、身近な地域の例を挙げながらあなたの考えを二百四十文字以内で書け。なお、や。や。やなどのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された漢文は返り点や送り仮名を省略している。〔内〕の文章は本文に補ったものである。（*印のついている言葉には、本文のあとに

〔注〕がある。）

中国文化が日本に伝わった初めは、西暦何年というようにはつきりとは定められない。はるかな上古から、九州地方と中国との間には、東シナ海を渡り、もしくは朝鮮半島を経由して、往来があった。それによって中国の文物も日本に伝えられたことだろうし、漢字と中国語も、少しずつ伝わっていったにちがいない。

その結果、いままでは記録する方法のなかった日本語が、漢字によって記録できるようになった。ただし、その方法には二通りある。一つは日本語をそのままに漢字であらわす方法、もう一つは日本語を漢文に翻訳して書く方法である。

(1) 前者の方法によって使われた漢字を、万葉がなという。奈良時代末期に作られた「万葉集」が、その代表的なものだからである。

さっき書いた第二の方法、つまり日本語を漢文に翻訳したものについて、これから書く。翻訳という方法はめんどろなようだが、近江・奈良朝時代の知識人はみな漢文を読み習っていたので、ものを書くときには、万葉がなのようなあて字を考えるよりも、いっそ漢文で書いたほうが、文章も短くてすむし、かえって手軽だったかもしれない。平生漢文ばかり読んでいると、発想法も自然と漢文的になるから、文章を書くときにも、先ず漢文的な表現の方が頭に浮かぶわけである。

それにしても、はじめのうちは、正式の文書は帰化人が書いたのであるろう。中国の歴史書である「宋書」夷蛮伝に、昇明二年（四七八）、日本国王の使者が来て呈出した文書をのせているが、それは完全な漢文で、中国の帰化人でなければ、これほどの文章は書けなかったろうと思われる。

る。

たしかに日本人が書いた漢文として最古のものは、推古天皇の十二年（六〇四）、聖徳太子が発布した十七条憲法である。この文章は多少日本語的な表現も見られるが、正式な漢文で書かれており、当時の日本人がかなりの程度まで漢文を読みこなしていたのを知ることができる。

A 十七条憲法

以和為貴、無忤為宗。人皆有党。亦少達者。是以、或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成。

（書下し文）

和を以て貴しと為し、忤うこと無きを宗とせよ。人皆有党あり。亦達れる者少し。是を以て、或いは君と父に順わず。乍隣里に違う。然れども上和ぎ下睦びて、事を論うに諧えば、則ち事理自から通い、何事か成らざらん。

（通釈）

お互いに仲良くし合うのを貴いこととし、物事に逆らうことのないのを第一とせよ。人は誰でも（仲間や親類などの）徒党があるし、よくわけのわかった人は少ない。そのために、当然従うべき主君や父（の命令）に従わなかったり、また隣近所の人たちと仲たがいたりする。しかし、上下の者が仲よくして、問題をうまく話し合えば、事の道理が自然と通じ、どんな事でも成功しないことはない。

十七条憲法のうち、最初の第一条である。聖徳太子（五七二—六二二）は用明天皇の第一皇子で推古天皇の摂政をつとめた。幼少より聡明で、一時に十人の訴えを聞いて誤ることがなかったため、豊聡耳皇子・八耳皇子と称されたことは有名な話である。十七条の憲法は、日本

最初の成文法であるが、現代の憲法とは異なって、いわば役人心得のようなものである。冒頭に論旨をかかげ、以下にその説明がつくという形をとっている点に注意してほしい。すなわち、 がこの一条の趣旨で、あとの文章はその説明である。

それから百年あまりたったのち、元明天皇の和銅五年（七一二）、太安万侶が勅命によって上古からの伝誦を記録し、「古事記」を作った。中国では、ちょうど唐の玄宗が即位した年にあたる。

「古事記」の文体は漢文を中心とするが、純粋な漢文ではない。たとえば、

国稚如浮脂而、久羅下那須多陀用幣疏之時

疏字以上
十字以音

（書下し文）

国稚く浮かべる脂の如くして、くらげなすただよへるの時

（通釈）

国土が若く、水に浮かんでいる脂のようで、くらげのようにふわふわと漂っていた時

とあり、上の句は漢文として読めるが、下の「久」から「疏」までの十字は、音で読めと注記がしてある。つまり「くらげなすただよへる」と読むわけである。⁽²⁾このような日本語は、そのまま漢文に翻訳することはできない。翻訳すれば全く別の表現となってしまうので、原文の味わいを出すために、ここは万葉がな方式を用いたのであろう。

日本は島国だから、日本人は昔から海洋についての知識が豊富である。「くらげなす（くらげのように）」と言えば、日本人は誰でも、ふわふわした状態を想像できる。ところが中国文化は中原という内陸部から開け

たので、海の知識には乏しい。くらげと言ってみたところで、大部分の中国人には、なんのことかわからなかったろう。だから「くらげなす」という日本語は、純粋な漢文には翻訳不可能だったのである。

「古事記」は稗田阿礼の口述にもとづいて太安万侶が書いたといわれる。阿礼の語りがたをなるべく残そうとしたために、安万侶は純粋な漢文体をとらなかつたのであろう。かれが漢文に熟達していた証拠に、「古事記」の序文はよく整った、六朝風の駢文で書かれている。これだけの漢文が書ける人は当時にも少なかつたろうし、だからこそ天皇から「古事記」筆録の命令を受けたのであろう。

これに対して、⁽³⁾もつぱら漢文で日本の歴史を書いたのが「日本書紀」である。この書物は元正天皇の養老四年（七二〇）に完成したもので、神代から持統天皇の十一年（六九七）までの歴史を編年体でしるし、三十巻としている。編者は天武天皇の皇子舍人親王となつてゐるが、親王一人の著述ではなく、大勢の学者の分担執筆によるものらしい。

「日本書紀」の文章は、「古事記」にくらべれば、はるかに純粋な漢文といえる。ただし、その漢文の模範となつたのは中国の歴史書の文章であり、したがって日本歴史の史実を、むりに中国風に変えて書いた部分がある。文章を流麗な漢文とするために、⁽⁴⁾事実の厳密な記録は、犠牲となつてゐるわけである。これは、歴史書としては致命的な欠陥だが、漢文でこれだけの大部な書物が書かれたことは、（帰化人の援助がある程度はあつたにしても）当時の日本人の学力がかなり進んでいたことを示すものといえよう。

（前野直彬「精講 漢文」による）

〔注〕上古——時代区分の一つ。日本では古墳・飛鳥時代。

近江・奈良朝——飛鳥時代から奈良時代まで。

平生——いつも。ふだん。

帰化人——外国から来て、その国の国民として暮らしている人間。

古代日本史上は「渡来人」。

「宋書」夷蛮伝——中国の宋の六十年間について書かれた歴史書の

の一部で、周辺国について記されている部分。

四八八年成立。

成文法——文字によって表記される形で制定されている法。

太安万侶——飛鳥時代から奈良時代にかけての貴族。

唐の玄宗——唐の第九代皇帝（在位七一二―七五六年）。

稗田阿礼——飛鳥時代から奈良時代にかけての人物。

六朝風の駢文——中国の文語文における文体の一つ。

編年体——事実の起こった順に年月を追って記す、歴史書の書き

方。

〔問1〕⁽¹⁾ 前者の方法によって使われた漢字を、万葉がなという。とあるが、

ここで挙げられている「万葉がな」とはどのようなものか。次のう

ちから最も適切なものを選び。

ア 日本語の言葉を、外見が漢文に見えるように書き表したものの。

イ 日本語の言葉を、そのままに漢字の音読みで表したものの。

ウ 帰化人が書いた日本語の文章から、字を新たに作ったものの。

エ 中国から渡来した書物の中にある日本語を使ったものの。

〔問2〕本文中の□に入る表現を、漢文Aの文中から四字で抜き出せ。

〔問3〕⁽²⁾ このような日本語はそのまま漢文に翻訳することはできない。とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 翻訳すると、それは中国語となってしまうので、古くからの日本に伝わる話を中国語で記録するのはふさわしくないから。

イ 翻訳を行った当時の日本には漢文を書ける人物は少なく、太安万侶には原文の味わいを残す力がなかったから。

ウ 文化や環境の違いから、日本語に固有の表現があり、中国語に言葉を置きかえても、伝えたいことが伝わらないから。

エ 中国文化は朝鮮半島を経由して海洋を渡ってきたため、日本文化と共通するところが多く、日本語そのままの表現で通じたから。

〔問4〕⁽³⁾ もっぱらのここでの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア しばしば

イ 独自に

ウ 無骨な

エ 全て

〔問5〕⁽⁴⁾ 歴史書としては致命的な欠陥だが、とあるが、歴史書としてどのようなことが失われているのか。十字以内で抜き出せ。

4			
〔問 4〕	〔問 3〕	〔問 2〕	〔問 1〕
イ	エ	エ	イ
6	5	5	5

3						
〔問 5〕	〔問 4〕			〔問 3〕	〔問 2〕	〔問 1〕
ウ	に	え	ネ	ア	ウ	エ
	感	る	ジ			
	じ	製	の			
	た	品	特			
	か	を	性			
	ら	つ	を			
	。	く	完			
		っ	全			
		て	に			
		や	理			
50	ろ	解		4	4	4
	う	し				
	と	た				
	い	上				
	う	で				
	熱	、				
	意	図				
	を	面				
8	ユ	を				
	ウ	超				

2	
(1) ソ	祖 2
(2) カン チ ョウ	干 潮 2
(3) ト ロ ウ	徒 労 2
(4) ハ ト バ	波 止 場 2
(5) キ キ ユ ウ ソ ン ボ ウ	危 急 存 亡 2

1	
(1) 反 (る)	そ る 2
(2) 折 節	おりふし 2
(3) 蚕 糸	さんし 2
(4) 野 放 図	の ほうず 2
(5) 流 言 飛 語	りゅうげんひご 2

5				
問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
事 実 の 敵 密 な 記 録	エ	ウ	以	イ
			和	
			為	
			貴	
	4	4	5	4

5

[illegible]

240

200

100

20